

社会的比較による自己ステレオタイプ化

森永康子・小林亮太・竹田奈央・南谷めぐみ・桑原桃子・大森麻由

Social comparison and self-stereotyping:
Gender of compared targets influences self-perceptions of men and women

Yasuko Morinaga, Ryota Kobayashi, Nao Takeda,
Megumi Minamitani, Momoko Kuwahara, and Mayu Omori

This study examined whether gender differences in self-rated personality traits are context dependent. Japanese university students rated themselves on positive and negative aspects of agency (masculine) and communion (feminine) traits in three comparative conditions: between-gender, within-gender, and control conditions. Results indicated that men perceived themselves as less feminine with regard to the positive aspects of communion than women in the intergroup comparison condition. Men in the intergroup condition had significantly lower ratings for the positive aspects of communion, compared to those in the other two conditions; however, these ratings were provided only by men with low social dominance orientation. Additionally, no significant differences were observed among women. Thus, the gender self-stereotyping process among men was discussed.

キーワード: self-stereotyping, gender, social comparison, social dominance orientation

問 題

性差は心理学において長い間論争されているテーマのひとつであり (e.g., Hyde, 2014; Maccoby & Jacklin, 1974), これまで認知的課題 (e.g., Hyde, Fennema, & Lamon, 1990), 社会的行動 (e.g., Eagly, Johannesen-Schmidt, & Van Engen, 2003), 感情 (e.g., Else-Quest, Hyde, Goldsmith, & Van Hulle, 2006), パーソナリティ (e.g., Lippa, 2010; Schmitt, Realo, Voracek, & Allik, 2008) などの心理学的変数において性差の有無やその大きさが検討されてきた。この中で, パーソナリティや性格特性の自己評定における性差はよく報告されるものの一つである (e.g., Cross, Bacon, & Morris, 2000; Lippa, 2010)。たとえば, Big Five と呼ばれる特性を測定する尺度において, 男性に比べると女性は, 神経症傾向, 協調性, 誠実性の得点が高い傾向があることが報告されている (e.g., Lippa, 2010; Schmitt et al., 2008)。

このようなパーソナリティや性格特性の評定における性差はなぜ生じるのであろうか。こうした

性差を説明する理論は、生物学的なもの和社会的なものを重視する立場に大別される。前者は進化心理学 (e.g., Buss, 1995; Buss & Schmitt, 2011) に代表されるように、子孫を残し自らの適応を最大化するために、男女は異なる役割行動をとるようになり、その結果、パーソナリティも異なるようになったと考えるものである。この立場では、文化や社会を問わず性差は普遍的なものと考えられる。一方、社会的な要因を重視する立場では、社会的役割理論 (e.g., Eagly, 1987; Eagly & Wood, 2012) にあるように、人は割り当てられた役割に応じたパーソナリティを身につけるとされ、パーソナリティの性差は男女に割り当てられている役割が異なるために生じると説明される。この立場では、男女が担う役割が文化によって異なれば、パーソナリティのどの面で性差が見られるかも文化に応じて異なると考えられる。

こうした説明に対して、Guimond, Chatard, Martinot, Crisp, & Redersdorff (2006) はパーソナリティや性格特性の自己認知が文脈依存的であることを、社会的比較理論 (Festinger, 1954) と自己ステレオタイプ化を用いて説明した。人は自らを知りたいときには他者との比較を行うが、Guimond et al. (2006) はその他者の性別によって自己認知が変化すると主張したのである。比較する他者が異性の場合に、自分の性別が顕著になることで、ジェンダー・ステレオタイプに沿った自己ステレオタイプ化が生じると考えた。この仮説のもと、Guimond et al. (2006) は男女高校生や大学生を対象に、同性や異性と自分を比較させた上で、ジェンダー・ステレオタイプにどの程度自分が当てはまるかを回答させた。その結果、同性比較条件よりも異性比較条件において性差が顕著であり、女性は男性よりも女性ステレオタイプである関係性、男性は女性よりも男性ステレオタイプである作動性に関連する項目を自分に当てはまるとしていた。

性差が社会的文脈に依存するという主張は新しいものではない (e.g., Deaux & Major, 1987) が、パーソナリティや性格特性の評定における性差を社会的文脈からとらえようとするこうした試みは、日本ではまだそれほど行われていない。こうした中で Morinaga & Sakata (in preparation) は、30代の男女を対象にしたオンライン調査において、社会的比較傾向の高い者において、異性との比較によってジェンダー・ステレオタイプに沿った自己ステレオタイプ化が生じることを見いだしている。これは、日本においても性差が社会的文脈に応じて生じることを示唆するものと言えよう。

ところで、パーソナリティ評定の文化比較を行った研究では、男女平等が進んだ国ほど性差が大きくなることが報告されている (e.g., Costa, Terracciano, & McCrae, 2001; Schmitt et al., 2008)。こうした文化差について、Guimond, Branscombe et al. (2007) は、社会的比較理論に加えて権力格差 (power distance; e.g., Hofstede, Hofstede, & Minkov, 2010) を用いて説明を行った。それによると、権力格差が小さい国つまり男女の地位の格差が小さい国では、異性と接触する機会が多いので、社会的比較の対象が異性であることが多く、性別をもとにした自己ステレオタイプ化が生じやすくなる。そのため、男女平等が進んでいる国ではパーソナリティの自己評定の性差が大きくなる傾向があるという。実際に、Guimond et al. (2007) は、権力格差の小さい国 (フランス、ベルギー、オランダ、米国) と大きい国 (マレーシア) の学生を対象に検討を行い、この仮説を支持する結果を得ている。また、個人がどのくらい権力格差を肯定するかについて、社会的支配志向 (SDO: Social Dominance Orientation; Jost & Thompson, 2000) を用いた検討も行っている。その結果、欧米においてのみであ

るが、異性との比較条件で SDO 得点と自己ステレオタイプ化に関連が見られ、SDO が低い学生のほうが SDO の高い学生よりも、自分の性別のステレオタイプの特徴で自己評定を行うことが見いだされた。

以上を踏まえ、本研究は比較対象の性別を実験的に操作することで、ジェンダー・ステレオタイプに沿った自己ステレオタイプ化がどのように生じるかを検討する。さらに、社会的支配傾向を個人特性としてとりあげ、自己ステレオタイプ化にどのように影響をするのかについても検討する。Guimond et al. (2007) と同様に、同性との比較条件および統制条件と比べて、異性との比較条件において男女の自己評定の差が大きいこと、その際に、社会的支配傾向の低い者のほうが高い者よりも性差が大きいと予想される。

方 法

参加者 広島大学の学生を対象に講義終了後に質問紙を配布した。回答に不備のあった者等を除き、297名（男性173名、女性124名、平均年齢18.9）を分析対象とした。

実験条件 異性と自分を比較させる異性比較条件、同性と比較させる同性比較条件、および比較を行わない統制条件を設け、ジェンダー・ステレオタイプ項目に回答させる前の教示を変えることで実験操作を行った。

質問紙の構成と質問項目¹ まず、すべての回答者に社会的支配志向 (SDO) 尺度の16項目について回答を求めた。SDO 尺度 (Jost & Thompson, 2000) は北米への留学経験のある2名が確認しながら翻訳し、日本語として意味の通じる文章に適宜変更したものを使用した。使用した項目は「自分のグループが欲するものを得るためには、他のグループに力を振るうことも時には必要だ」「すべてのグループが平等に機会を与えられるべきだ」などであった。回答は「1. 非常にネガティブに感じる」から「7. 非常にポジティブに感じる」の7件法で求めた。

次に、自己ステレオタイプ化の測度として共同性・作動性尺度 (CAS: Communion-Agency Scale; 土肥・廣川, 2004) を使用した。この尺度は、女性性 (共同性) と男性性 (作動性) をポジティブな面とネガティブな面からとらえようとしたものである。肯定的共同性は「思いやりをもって人と接している」「相手の立場に立って考えられる」など、肯定的作動性は「積極的に活動する」「意志が強く、信念を持っている」など、否定的共同性は「他人のことを気にしすぎる」「周りの人のことを考えすぎて、行動できない」など、否定的作動性は「人に攻撃的な態度をとる」「人の失敗は許せない」などであり、それぞれ6項目ずつからなっている。

この尺度への回答を求める際に行う教示文を3種類作成した。たとえば、「自分を女性と比べてみてください。たいがいの女性に比べて、次のような特性は、あなたにどのくらい当てはまると思えますか」という教示文では、回答者が男性の場合には異性比較条件、回答者が女性の場合には同性比較条件とした。統制条件は比較に関する教示はなく、「あなたにどのくらい当てはまると思えますか」という教示のみを行った。こうした教示の後、CAS への回答を求めた。なお、CAS はカウンターバランスを取るため、項目順番の異なる2種類を作成した。回答は「1. 全く当てはまらない」

¹ 質問紙には社会的比較志向とそれに関連する項目も入っていたが、本論文では報告しない。

から「7.非常に当てはまる」の7件法で求めた。

結 果²

SDO 尺度および CAS についてそれぞれ確証的因子分析を行った。両尺度とも適合度指標がそれほど高くないが、許容範囲と判断し (SDO: $\chi^2(103)=301.11, p<.001, CFI=.844, RMSEA=.080, GFI=.891, AIC=367.118$; CAS: $\chi^2(246)=735.29, p<.001, CFI=.763, RMSEA=.082, GFI=.813, AIC=843.289$), 作成者と同様の下位尺度を採用することにした。SDO の 2 因子は, Jost & Thompson (2000) にもとづき, 平等性の否定 (OEQ: Opposition to Equality, $\omega=.711$), 集団間格差の肯定 (GBD: Group-Based Dominance, $\omega=.833$) と名付け, 各因子に高負荷する項目の平均値を算出しそれぞれの尺度得点とした。両尺度の相関係数は $r=.291, p<.001$ であった。それぞれの尺度について回答者の性(2)×実験条件(3)の分散分析を行ったところ, いずれも性別の主効果が有意であり (OEQ: $F(1,291)=11.517, p=.001, \eta_p^2=.038$; GBD: $F(1,291)=16.529, p<.001, \eta_p^2=.054$), 女性よりも男性のほうが平等性を否定し, 集団間の格差を肯定する傾向がみられた (OEQ: 男性 $M=3.72, SE=.068$, 女性 $M=3.37, SE=.080$; GBD: 男性 $M=3.46, SE=.056$, 女性 $M=3.11, SE=.066$)。いずれの尺度も, 条件の主効果および性別と条件の交互作用は有意ではなかった ($ps \geq .178, \eta_p^2s \leq .012$)。なお, 本研究では, Guimond et al. (2007) に従い, GBD 得点を集団間の地位の差を肯定する傾向とみなし, 以下の検討に用いた。CAS についても同様に, 土肥・廣川 (2004) に従い, 肯定的共同性 ($\omega=.781$), 肯定的作動性 ($\omega=.762$), 否定的共同性 ($\omega=.701$), 否定的作動性 ($\omega=.777$) と名付け, 各因子に高負荷する項目の平均値を算出しそれぞれの尺度得点とした。

次に, CAS の 4 つの因子のそれぞれについて, 2 (回答者の性別) × 2 (GBD の高低) × 3 (実験条件) の 3 要因分散分析を行った。分散分析の結果, 肯定的共同性において, 3 要因の交互作用が有意であった ($F(2,285)=5.225, p=.006, \eta_p^2=.035$)。GBD の高低に分けて, 単純効果の検討を行ったところ, GBD の低い場合において, 性別×実験条件の単純交互作用が有意であった ($F(2,285)=6.941, p=.001, \eta_p^2=.088$)。下位検定の結果, 異性比較条件で有意な性差が見られ, 女性は男性よりも肯定的共同性の得点が高かった (Figure 1)。また, 女性は条件間で有意な差が見られなかったが, 男性は

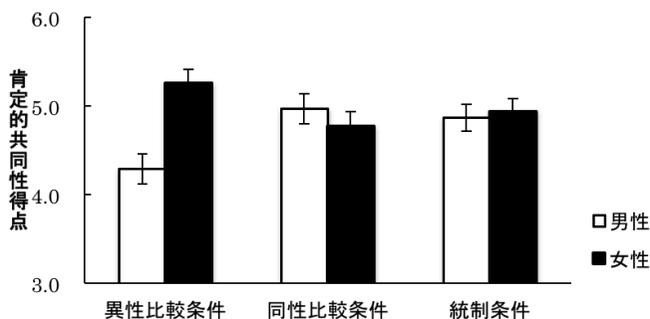


Figure 1. 条件ごとの男女の肯定的共同性得点 (GBD低群)

² 本研究の分析は, HAD (清水・村山・大坊, 2006) を用いて行った。

条件間に有意な差異が見られ ($F(2,285)=4.826, p=.009, \eta_p^2=.124$), 多重比較 (Holm 法) を行ったところ, 異性比較条件が他の2条件よりも得点が低かった。しかし, GBD の高い場合には有意な差異は見られなかった。なお, 肯定共同性においては, その他に有意な結果は見られなかった。

否定的作動性においては GBD の主効果が有意であり ($F(1,285)=11.252, p=.001, \eta_p^2=.038$), GBD が高い者の方が低い者よりも否定的作動性の得点が高かった (それぞれ, $M=3.35, 2.99$)。また, GBD と条件の交互作用も有意であった ($F(2,285)=5.307, p=.005, \eta_p^2=.036$)。交互作用を検定したところ, GBD が高い場合に異性比較条件は同性比較条件や統制条件よりも否定的作動性の得点が高かった (それぞれ, $M=3.68, 3.25, 3.11$)。肯定的作動性および否定的共同性では有意な効果は見られなかった。

なお, SDO のもう一つの下位尺度である OEQ を用いて同様の分析を行ったところ, 肯定的共同性, 否定的共同性, 否定的作動性において OEQ の高低の主効果が有意であった ($.003 \leq ps \leq .045, .014 \leq \eta_p^2 \leq .031$)。肯定的共同性と否定的作動性において, OEQ の高い者のほうが低い者よりも, 否定的共同性では OEQ の低い者の方が高い者よりも, CAS の得点が高かった。しかし, 性別や条件との有意な交互作用は見られなかった。

考 察

本研究は日本の大学生を対象とし, 比較対象によってジェンダー・ステレオタイプに沿った自己ステレオタイプ化が生じるか, また, 社会格差を受容する程度によって自己ステレオタイプ化が異なるかどうかを検証することであった。先行研究 (Guimond et al., 2007) と同様に, 社会的格差志向の下位尺度である集団間格差を肯定する傾向を個人特性として用い, 比較対象の違いによる検討を行ったところ, ジェンダー・ステレオタイプの中の肯定的共同性において, 有意な交互作用が見られた。下位検定の結果, 集団間格差を肯定しない者において, 自分と異性を比較する条件で性差がみられ, 男性は女性よりも肯定的共同性を自己に当てはまらないとしていた。これは, Guimond et al. (2007) が権力格差の小さい国を対象に分析した結果と一致する方向にある。このように, 本研究でも比較対象の性別によりジェンダー・ステレオタイプに一致する方向で自己認知が変わる可能性が示されたと言えよう。

また, この結果は異性比較条件の男性が他の2つの条件よりも得点が低かったことによるものであった。Guimond et al. (2007) では男女のいずれの認知が変わるのかは検討されていないが, 本研究では男性が自分と異性を比較すると自分の肯定的共同性を低く認知するようになっていた。女性においてはこのような違いは見られず, 男性が女性との比較を行うことによって, 女性のステレオタイプを否定する方向に自己認知が変化し, その結果, 性差が生じるというプロセスがあることが推測できる。

米国のジェンダー・ステレオタイプ研究においても, ジェンダー・ステレオタイプが自分に当てはまるかどうかという判断が状況において異なるのは, 主に男性で見られるという結果が得られている (e.g., Bosson & Michniewicz, 2013; Casper & Rothermund, 2012)。なぜ状況に応じてジェンダー・ステレオタイプに沿った自己ステレオタイプ化が男性で生じるのであろうか。これについては主に

動機的な面に焦点をあてた説明が行われている。Bosson & Michniewicz (2013) は、男らしさが他者からの評価によってのみ獲得されるという不安定な特徴をもっているため (Vandello, Bosson, Cohen, Burnaford, & Weaver, 2008), 女性と比較されるような状況では自分が男らしいことあるいは女らしくないことを示さなければならないと主張している (e.g., Bosson & Michniewicz, 2013)。一方, Casper & Rothermund (2012) は、女性は内集団のステレオタイプを自分に当てはめるが、男性は自分の特性を内集団に当てはめる傾向があり、さらに、男性ではステレオタイプへの接近可能性が状況に応じて変わると述べている。そのために、女性は常に女性のステレオタイプを使って自己ステレオタイプ化をするので、状況による変化はあまりないが、男性は状況に応じて自己ステレオタイプ化の内容や程度が変化するという。なぜこうした性差が生じるのかについて、Casper & Rothermund (2013) は、男性は独立的でユニークであることを学習しているので、他者と異なる自己概念をもとうとし、自己ステレオタイプ化が状況依存的になるためであろうとしている。いずれの理論も動機的な面を根拠としているが、Bosson & Michniewicz (2013) が男らしさの否定的な面に注目するのに対して、Casper & Rothermund (2012) は男らしさの肯定的な面に注目していると言えよう。本研究はこうした動機的な側面については検討していないが、今後は、こうした面も考慮しながら、異性との比較によって自己ステレオタイプ化が生じるプロセスについて検討していくことが必要であろう。

引用文献

- Bosson, J. K., & Michniewicz, K. S. (2013). Gender dichotomization at the level of ingroup identity: What it is, and why men use it more than women. *Journal of Personality and Social Psychology*, **105**, 425-442.
- Buss, D. M. (1995). Psychological sex differences: Origins through sexual selection. *American Psychologist*, **50**, 164-168.
- Buss, D. M., & Schmitt, D. P. (2011). Evolutionary psychology and feminism. *Sex Roles*, **64**, 768-787.
- Casper, C., & Rothermund, K. (2012). Gender self-stereotyping is context dependent for men but not for women. *Basic and Applied Social Psychology*, **34**, 434-442.
- Costa Jr, P., Terracciano, A., & McCrae, R. R. (2001). Gender differences in personality traits across cultures: Robust and surprising findings. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 322-331.
- Cross, S. E., Bacon, P. L., & Morris, M. L. (2000). The relational-interdependent self-construal and relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 791-808.
- Deaux, K., & Major, B. (1987). Putting gender into context: An interactive model of gender-related behavior. *Psychological Review*, **94**, 369-389.
- 土肥伊都子・廣川空美 (2004). 共同性・作動性尺度 (CAS) の作成と構成概念妥当性の検討: ジェンダー・パーソナリティの肯否両側面の測定 心理学研究, **75**, 420-427.
- Eagly, A. H. (1987). *Sex differences in social behavior: A social-role interpretation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

- Eagly, A. H., Johannesen-Schmidt, M. C., & Van Engen, M. L. (2003). Transformational, transactional, and laissez-faire leadership styles: A meta-analysis comparing women and men. *Psychological Bulletin*, **129**, 569-591.
- Eagly, A. H., & Wood, W. (2012). Social role theory. In P. A. M. Van Lange, A. W. Kruglanski, & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of theories of social psychology*. Vol.2. Thousand Oaks, CA: Sage. pp.458-476.
- Else-Quest, N. M., Hyde, J. S., Goldsmith, H. H., & Van Hulle, C. A. (2006). Gender differences in temperament: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, **132**, 33-72.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Guimond, S., Branscombe, N. R., Brunot, S., Buunk, A. P., Chatard, A., Désert, M., Garcia, D. M., Haque, S., Martinot, D., & Yzerbyt, V. (2007). Culture, gender, and the self: Variations and impact of social comparison processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 1118-1134.
- Guimond, S., Chatard, A., Martinot, D., Crisp, R. J., & Redersdorff, S. (2006). Social comparison, self-stereotyping, and gender differences in self-construals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**, 221-242.
- Hofstede, G., Hofstede, G. J., & Minkov, M. (2010). *Cultures and organizations: Software of the mind*. New York; McGraw Hill.
- Hyde, J. S. (2014). Gender similarities and differences. *Annual Review of Psychology*, **65**, 373-398.
- Hyde, J. S., Fennema, E., & Lamon, S. J. (1990). Gender differences in mathematics performance: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, **107**, 139-155.
- Jost, J. T., & Thompson, E. P. (2000). Group-based dominance and opposition to equality as independent predictors of self-esteem, ethnocentrism, and social policy attitudes among African Americans and European Americans. *Journal of Experimental Social Psychology*, **36**, 209-232.
- Lippa, R. A. (2010). Gender differences in personality and interests: When, where, and why? *Social and Personality Psychology Compass*, **4**, 1098-1110.
- Maccoby, E. E., & Jacklin, C. N. (1974). *The psychology of sex differences*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Morinaga, Y., & Sakata, K. (in preparation). Does being with women make men feel more masculine? Social comparison and gender stereotypes in Japan.
- Schmitt, D. P., Realo, A., Voracek, M., & Allik, J. (2008). Why can't a man be more like a woman? Sex differences in Big Five personality traits across 55 cultures. *Journal of Personality and Social Psychology*, **94**, 168-182.
- 清水裕士・村山 綾・大坊郁夫 (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析(1) コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用 電子情報通信学会技術研究報告, **106**, 1-6.
- Vandello, J. A., Bosson, J. K., Cohen, D., Burnaford, R. M., & Weaver, J. R. (2008). Precarious manhood. *Journal of Personality and Social Psychology*, **95**, 1325-1339.

附記

本論文は、広島大学教育学部心理学系コースの3年生科目である心理学課題演習で行われた研究をもとに執筆したものである。研究の概要については、中国四国心理学会第70回大会で開催された学部生研究発表会において小林らが報告した。データ収集にあたり、広島大学大学院総合科学研究科 坂田桐子先生にご協力いただいた。なお、本研究の一部は JSPS 科研費（課題番号 263808440）の助成を受けた。